

報告テーマ

タイ・天然ゴム産業の高度化をめぐる官民の役割：マレーシアとの比較より

氏名（所属）

河野 元子（政策研究大学院大学）

要旨

天然ゴムは、20 世紀初頭から自動車の発明と自動車産業の勃興にともなうタイヤ原料の需要の急増で生産を拡大させた。1980 年代後半以降、生産世界一の座を退いたマレーシアにかわって、タイ・インドネシアが台頭する一方で、21 世紀にはいると他の東南アジア諸国が追随し生産を拡大させている。その背景として、ゴム産業構造に二つの大きな変化がみられることが指摘できる。ひとつは、急速な経済発展がすすむ大国の中国やインドなどにおける自動車産業、タイヤ産業さらにその他のゴム関連作業の急成長である。もうひとつは、HIV/AIDS、SARS や鳥インフルエンザ等の流行に対しての医療用使い捨てゴム手袋やコンドーム、また医療の高度化にともなう医療用カテーテルなど保健・医療関連産業部門における急速な需要拡大である。このような多様な天然ゴム産業の発展には、安定的な天然素材の供給が不可欠であるとともに、川上（天然ゴムの生産）、川中（ブロックラバー、ラテックスラバーの加工生産）から川下（タイヤ、ゴム手袋など多様な最終品の製造）に至る天然ゴムのバリューチェーン各部門における、高付加価値化が強く求められている。

本報告では、現在世界一の天然ゴムの生産量と輸出量を誇るタイを対象に、同国における天然ゴム産業の発展について、ゴム産業の先進国といえるマレーシアとの比較より明らかにする。両国は、製造業をエンジンとした輸出志向型産業の発展で急速に発展した。しかしながら、97/98 アジア通貨危機により、その経済成長は鈍化し、もとの勢いはない。他方、ゴムやオイル・パームなどの熱帯アグロ資源型産業が新たな展開をみせている。注目するのは、多様化する天然ゴム産業の構造変化に対し、いかに高度化を図っているのか、政府および公的研究機関、また各企業の取り組みとその成果である。タイの天然ゴム産業各部門の技術発展についてマレーシアと比較分析することで、発展のタイミング、そこに関わる組織またアクターの組み合わせが異なることを明らかにする。その一方で、重要な共通点として、高度化においては公的研究機関が重要な役割を果たしていること、川下部門のさらなる発展には企業の役割が大きいことを明らかにする。さらに、タイの天然ゴム産業の特徴ともいえる、その不均分な発展、とくに製造業部門における高度化が遅れていることを指摘しつつ、この現状に対し官民はどのように対応しようとしているのか、今後の課題とともに考察する。最後に、天然ゴム産業の事例で得た知見より、アグロ資源利用型産業の発展可能性と課題について若干の議論を試みたい。